

紀 要

第 14 号

2001. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

古代末における「在地産タタキ甕」についての基礎的研究

— 近江の事例を中心に —

重岡 卓

1. はじめに

かつて筆者は、犬上郡域を中心に出土する「いわゆる甲良甕」(以下では記述の便を図るため、単に「甲良甕」と呼称する)についての報告と若干の検討を行った(重岡1997 以下では前論と呼称する)。発表後、多くの方々から御批判いただくとともに、資料の増加が見られた。また、平成12年度に出土遺物再収納業務の中で、報告書非掲載資料を中心にコンテナ数約1,500箱の遺物を実見する機会を得、過年度の滋賀県教育委員会調査資料中に「甲良甕」に類似する甕類を見出す事ができた。資料を実見する中で、古代末のタタキを施す甕には地域ごとの差異があり、また同時期の煮炊具の様相にも多様性が見受けられ、その分布もほぼ近江の全域に広がる事が判明した。前論で一括して「甲良甕」と呼称した甕にさらに検討を加える必要を痛感するに至ったのである。本論では、現時点での古代末の「在地産タタキ甕」を中心に、同時期の煮炊具について滋賀県内の資料報告を行うとともに、若干の考察を行いたい。

2. 型式の設定

古代末において、成形にタタキを用いる土師器甕は、平安京内をはじめ、幾つかの地域で見られる。近江を例にとっても、後に見るようにそのほぼ全域に分布するとともに、地域的な差違がみられる。「甲良甕」の名称は前論において便宜的に用いたものであり、かような状況には適切な名称ではない。本論は対象地域を「近江」に限定するものであるから、他地域の資料との判別を図る上であくまでも「在地的なもの」としての性格を明示する意味で、「近江における在地産土師器タタキ甕」(以下では在地産タタキ甕と呼称する)を対象として論を進めるために、便宜上の型式を設定しておきたい。名称は各型式において分布の中心を為す地域名(具体的には明治12年段階の旧郡域と名称(滋賀縣各郡発行の

郡誌(明治12~14))を用いる。

伊香型甕 口径が20cmを超える中胴のもの(以下では「甕」と呼称する)と12cm前後を測る短胴のもの(以下では「小甕」と呼称する)に器種が分化している。在地産タタキ小甕は、伊香郡のみに分布する特徴を持つ。甕は、口縁部が軽く受け口状を呈するものと、口縁端部を立ち気味につまみあげる二種がある。胎土は犬上型甕に比して長石粒など含む荒いもので、色調は淡黄白色を呈する。伊香郡井口遺跡群に見られる。

坂田型甕 口径12cm前後を測る中胴のもので、口縁端部は軽く内彎し、頸部に顕著なヨコナデが見られる。タタキは下半部のみ施されるものが多い。胎土には雲母を含み、色調は茶褐色を呈する。坂田郡東半、山東町を中心に分布する。

犬上型甕 前論での「甲良甕」で、犬上郡東半を中心に分布する。

神崎型甕 犬上型との相違は、一部に内面に同心円状の当て具痕跡が残るものが見られること、口縁部がかかるく受口状を呈すること、色調が淡褐色を呈するものであることが挙げられる。神崎郡建部遺跡群を中心に分布する。

高島型甕 成形に平行タタキを用いる点に特徴が見られる。犬上型に比して長石やチャートなどから成る砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。高島郡の一部に見られる。

ここで、以下の論を進めるにあたって、さしあたり必要となる用語および依拠する年代観について述べておく。

対象地域における前代の「近江型甕」を中心とした煮炊具からの系譜を引くものを「近江型系甕」・「近江型系小甕」(畑中1996b)、同じく前代において湖南地域に盛行した「湖南甕」に伴う煮炊具(畑中1996b)を「湖南系甕」、北陸地方で古代末に盛行した煮沸具に類似したものを「北陸系甕」(北野1996)と記述する。当然、これらの系譜は本論で便宜上用

いるもので、それ自身さらに検討されるべき必要がある。また、大和や山城といった県外での出土例が散見されるが、本論においては滋賀県内における出土例のみを対象とする。さらに、検討可能な資料については供膳具についても検討し、本論の中心である煮炊具とあわせて考察して行きたい。

遺物の形式と年代観は、須恵器や土師器供膳具については「都城の土器」1～3、施釉陶器については「古代の土器研究 一律令的土器様式の西・東3施釉陶器」の尾野善裕氏による東海産施釉陶器の編年(尾野1992)に、同氏の修正編年(尾野1997)を加味して判断した。また、近江における8世紀代の煮炊具は、管見での資料観察に加え、「古代の土器4煮沸具」近江(畑中1996b)に依拠する。

3. 分布状況

本章では、管見で在地産タタキ甕の出土が認められた地域を旧郡ごとに記述していく。なお、在地産タタキ甕の出土例の見られなかった甲賀郡については本論では触れていない。

(1) 伊香郡・浅井郡

①概要 伊香郡15遺跡、浅井郡13遺跡出土遺物の一部を実見した⁽¹⁾。このうち、在地産タタキ甕の出土が報告されているのは、4遺跡(井口・柏原・柏原北・黒田長野古墳群)である⁽²⁾。今回、新たに出土が確認できたのは、保延寺・大海道・今西・早崎・満願寺の5遺跡で、あわせて8遺跡において確認できた⁽³⁾。このうち、井口遺跡と柏原遺跡では、柏原北遺跡出土資料と合わせて遺跡内で竪穴住居出土資料を中心に編年を行っている(報告者の意向を反映し、以下では井口遺跡・柏原遺跡・柏原北遺跡の3遺跡を「井口遺跡群」と呼称する)。この中で、在地産タタキ甕・小甕両者が第9～11期(報告書編年、以下省略)における煮炊具の中心器種と位置づけ、年代としては第9～11期を共伴する東海産施釉陶器を中心とした供膳形態の土器群から第9期を9世紀前半、第10期を9世紀後半、第11期を10世紀初頭と想定している⁽⁴⁾。特に、伊香型甕・小甕の共伴関係が9世紀初めに出現したとされ、第10期に位置付けられるK14・K31型式段階の灰釉碗・皿に先行するものとされている。

また、黒田長野古墳群第1号墓における遺物の共伴関係からは9世紀後半の年代が想定されている。

②検討 ここでは、検証可能な井口遺跡群について検討を行いたい。

今回、筆者は井口遺跡群出土遺物のうち報告書非掲載土器を実見する機会を得、これらの資料から報告の再検証を行った。その結果、前述の伊香型甕の存在と、前論中の犬上型甕との差異を認識するに至った。以下では実見できた資料について概要を述べていきたい。

「近江型系甕」は、須恵器坏A・B・G、坏蓋BⅡ、土師器坏A、回転台土師器坏との共伴例が多く、若干ではあるが土師器碗A、皿A、黒色土器坏やK14・K31型式段階の灰釉碗との共伴例が見られた。

伊香型甕は、K14・K31型式段階の灰釉碗・皿との共伴例が少数見られ、O53型式段階以降の灰釉・緑釉碗・皿、「近江産」緑釉碗・皿、回転台土師器との共伴例が非常に多い。また、伊香型甕・小甕がともに共伴する例が各時期を通して非常に多く見られ、「近江型系甕」や鍋が少数見られた。

逆に、山茶碗小皿や近江産黒色土器碗との共伴例は少なく、少数ながら羽釜との共伴例が見られた。これは、調査区全体において当該期の資料が少ないことに起因する可能性がある。

以上の概況を、報告者の編年観と合わせるならば、第1期から第8期までの期間はほぼ「近江型系甕」の煮炊具が主流となり、第9期と第10期において「近江型系甕」と伊香型甕が拮抗し、第11期から第16期までの期間は伊香型甕が主流となるが、第11期においては「近江型系甕」・鍋が、第12期から第16期には「北陸系甕」が、これを補完する形で少数見られる。第17期からは、伊香型甕と羽釜の共伴例が見られ始めるが、輸入磁器の出現期とされる第18期には伊香型甕は見られなくなり、羽釜が主流となっていく。

以上の状況から、井口遺跡群において伊香型甕は、報告者の年代観に照らし合わせると、9世紀に出現し、9世紀後半から煮炊具の主流となり、11世紀前半まで使用されていた、といえよう。ただし、その終末期については検討資料数が少なく、可能性の域に評価を留めておきたい。また、この地域において

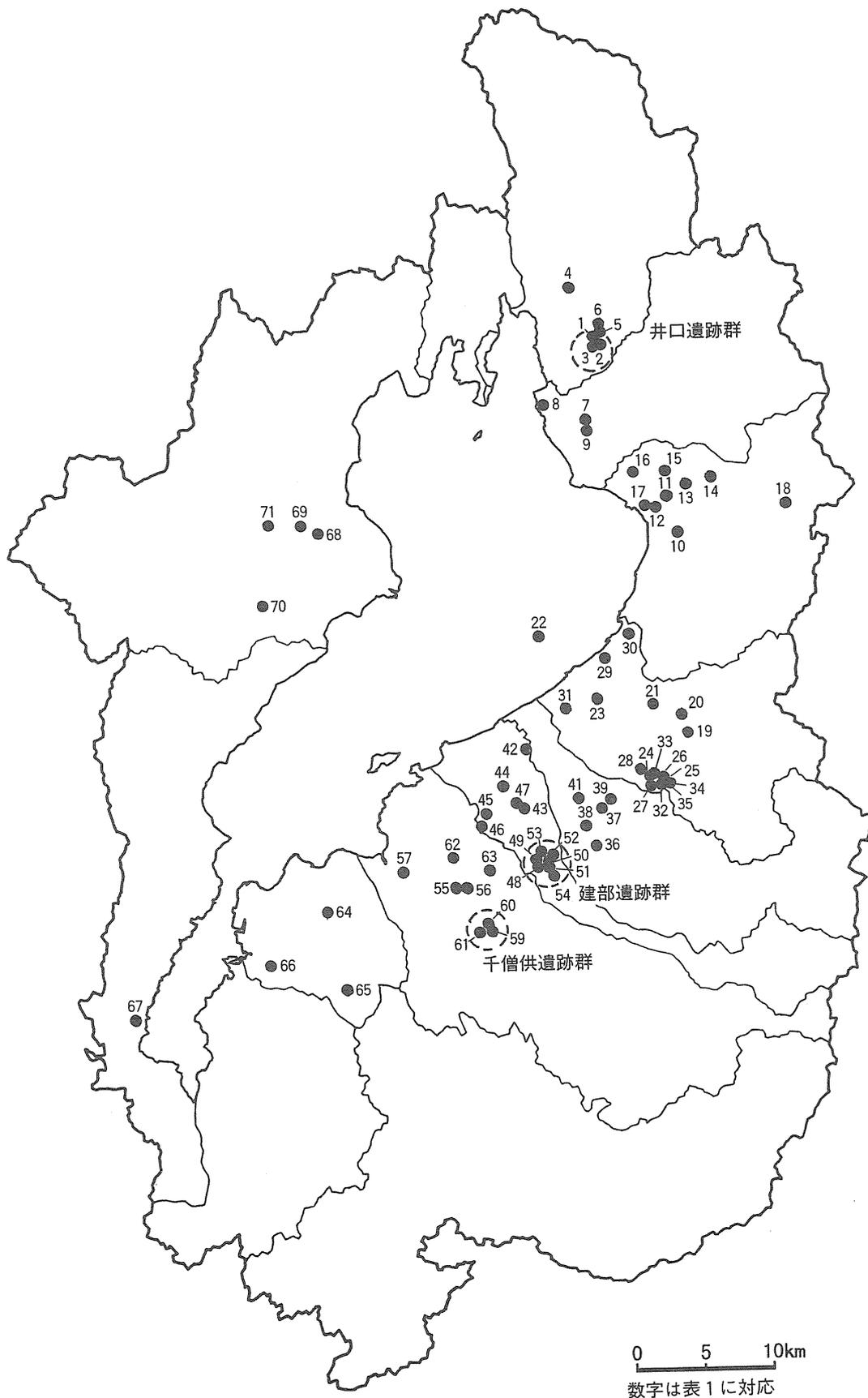


図1 近江における在産タタキ甕出土地点図

表1 在地産タタキ甕出土遺跡一覧

番号	遺跡名	出土タタキ甕の型式	番号	遺跡名	出土タタキ甕の型式	番号	遺跡名	出土タタキ甕の型式
1	井口	伊香	25	北落	犬上	49	建部大塚古墳群	神崎
2	柏原	伊香	26	尼子	犬上	50	建部城	神崎
3	柏原北	伊香	27	尼子南	犬上	51	浅前	神崎
4	黒田長野古墳群	伊香	28	尼子西	犬上	52	建部北町古墳群	神崎
5	保延寺	伊香	29	彦根城(城下町)	犬上	53	建部下野	神崎
6	大海道	伊香	30	松原内湖	犬上	54	川合寺	神崎
7	今西	犬上	31	妙楽寺	犬上	55	金剛寺	犬上
8	早崎	犬上	32	四十九院	犬上	56	御所内	犬上
9	満願寺	伊香	33	在土北	犬上	57	森ノ前	犬上
10	法勝寺	犬上	34	小川原	犬上	58	馬淵	犬上
11	大辰巳	犬上	35	雨降野	犬上	59	千僧供古墳群	犬上
12	鴨田	犬上	36	畑田麿寺	犬上・神崎	60	榎木立	犬上
13	大東	犬上	37	塔之塚麿寺	犬上・神崎	61	千僧供麿寺	犬上
14	今川館	犬上	38	野々目麿寺	犬上・神崎	62	浅小井	犬上
15	榎木百坊	犬上	39	毛入堂	犬上	63	内野	犬上
16	新庄馬場	犬上	40	目加田麿寺	犬上	64	木部天神前古墳	犬上
17	大戌亥	犬上	41	大間寺	犬上	65	久野部	犬上
18	御墓	坂田	42	出路	犬上	66	赤野井	犬上
19	四手	犬上	43	斗西	犬上	67	北大津	犬上
20	久徳	犬上	44	脉光寺	犬上	68	正伝寺南	高島
21	木曾	犬上	45	伊庭(高木)	犬上	69	堀川	高島
22	多景島	犬上	46	南須田(五十)	犬上	70	中ノ坊	高島・犬上
23	竹ヶ鼻・品井戸	犬上	47	中沢	犬上	71	井ノ口	高島・犬上
24	下之郷	犬上	48	建部日吉	神崎	72	法養寺	犬上

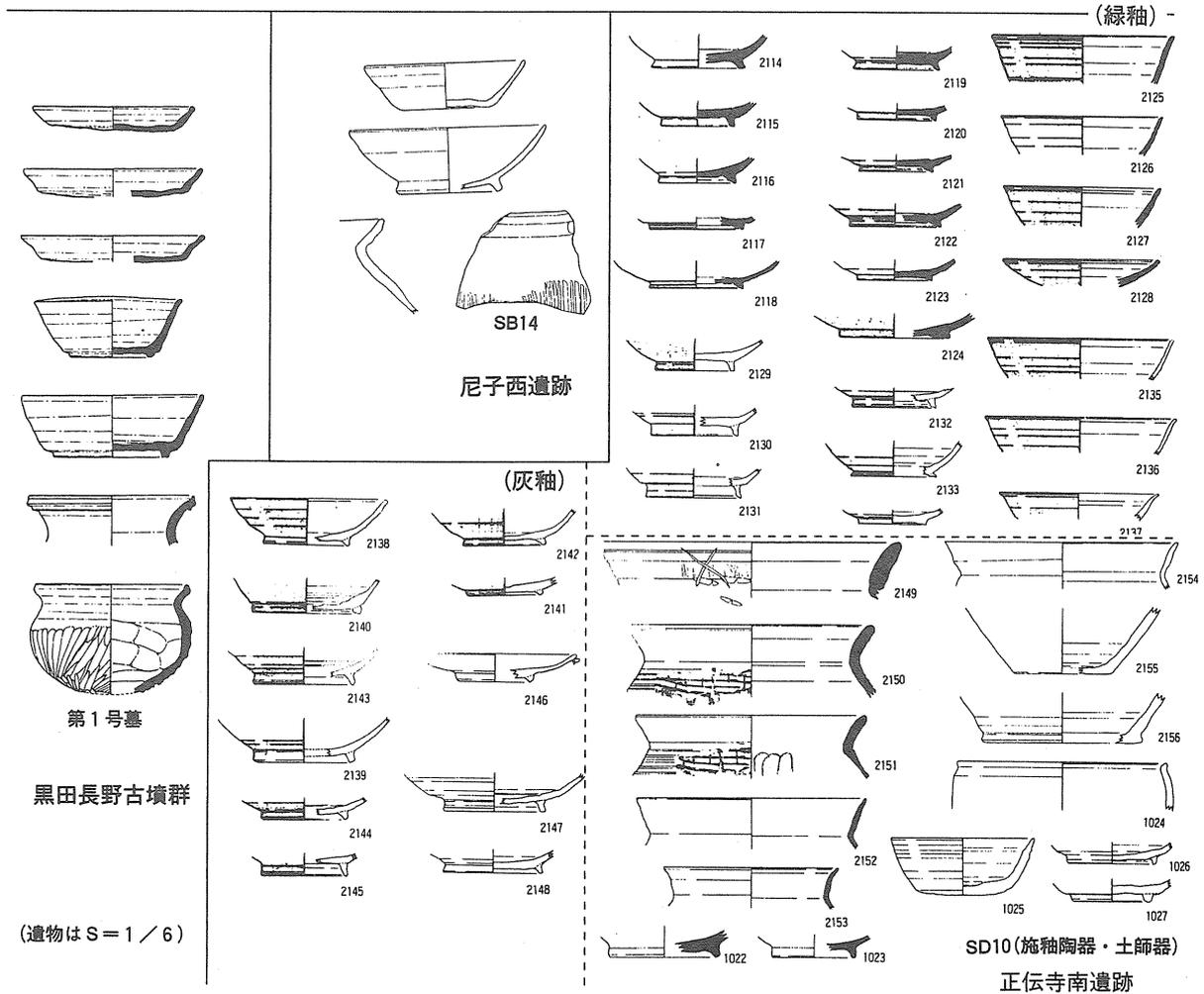


図2 在地産出タタキ甕共伴資料

も、伊香型甕は「近江型系甕」と製作技術において連続性は見られない。

伊香型甕の出現期は、前述のように東海産施釉陶器の檜崎彰一氏の編年に依拠している。しかし、前述したように本論で依拠する東海産施釉陶器の年代観によれば、9世紀後半とするのが妥当であろう。井口遺跡群における古代末の煮炊具の様相は、伊香・浅井両郡の全域に一般的なものであろうか。以下では、伊香・浅井両郡における煮炊具の流れを概観してみたい。実見できた資料の中では、井口遺跡群に比較しうるものとして北野A遺跡と保延寺遺跡・大海道遺跡を挙げることができる。ここでは、少量あるいは全く伊香型甕は出土しておらず、「近江型系甕」が9世紀後半代まで残り、その後「北陸系甕」の煮沸具に変化しており、伊香型甕は主要な煮炊具に用いられていない。

③小結 井口遺跡群において、「近江型系甕」から伊香型甕への変化という9世紀後半代の「大きな変化」が見られた。

しかし、この状況は、現在の調査資料においては当該地域の一般的状況とは言えない。保延寺遺跡や大海道遺跡では「北陸系甕」が煮炊具の主流を占めて伊香型甕は客体的な印象を受けるし、今西遺跡と早崎遺跡では犬上型甕の出土を見ている。実見できた資料では、9世紀代に「近江型系甕」から「北陸系甕」へと煮炊具が変化する遺跡が多いように見受けられる。

ここでは、井口遺跡群においてのみ認めうる変化であるという点に注目しておきたい。

(2) 坂田郡

①概要 44遺跡出土遺物の一部を実見した⁽⁵⁾。これらの中で、新たに出土が確認できたのは、法勝寺、大辰巳、鴨田、大東、今川館、榎木百坊、新庄馬場の7遺跡で確認できた。さらに上記遺跡以外に、在地系タタキ甕の出土が報告されているのは、小甕2点⁽⁶⁾が土壌から出土している御墓遺跡と大戌亥遺跡⁽⁷⁾である。

御墓遺跡を除いて、出土例はいずれも細片で、かつ犬上型甕である。このうち、出土点数が十点を超えるのは法勝寺遺跡と鴨田遺跡である。

②検討 法勝寺遺跡では、約20点を確認したが、

いずれも包含層出土資料であった。また、御墓遺跡出土例は、須恵器坏B・蓋、土師器坏・皿・壺と在地系タタキ甕2点が相伴している。須恵器坏Bの形状から、9世紀後半のものと報告されている。報告書に掲載されていない細片資料において、在地産タタキ甕の体部を見出した。この際、前述のした坂田型甕の特徴を見出したが、管見では3点のみを確認した⁽⁸⁾に留まる。

鴨田遺跡L区SR-1は、第2層中より出土した多量の祭祀関連遺物と堰状遺構で著名である。本遺構ではその上層に当たる第1層において犬上型甕の細片が5点が出土している。この層中の出土遺物は、報告者によると8世紀後半から9世紀前半と、年代幅がみられる。実見し得た資料では、「近江型系甕」が煮炊具において大半を占めていた。また、供膳具ではK14・K31型式段階の東海産施釉陶器碗・皿が若干量出土し、須恵器坏B、回転台土師器坏が多数出土している。管見では回転台土師器坏が数量的に多数を占めていた。報告者の遺物の年代観は、東海産施釉陶器に関しては檜崎氏の編年に依拠していると思われるが、本論では流路の埋没年代を9世紀後半とし、犬上型甕の年代観に矛盾しないものとする。いずれにせよ、鴨田遺跡においては犬上型甕が煮炊具の主流とはならない、と考えるのが妥当であろう。

③小結 坂田郡においては在地産タタキ甕が煮炊具の中では客体的なものにとどまり、それは犬上郡付近より搬入されたものとするのが妥当である。ただし、坂田郡の東半地域では、現在の山東町を中心に坂田型甕が多量に出土しているという意見がある⁽¹⁰⁾。

古代末における坂田郡内の土器様相は、現時点では良好な資料に恵まれず、不明な点が多い。今後、資料の増加を待って、改めて検討すべきであろう。

(3) 犬上郡

①概要 23遺跡の出土遺物の一部を実見した⁽¹¹⁾。これらの遺跡を含めて、犬上型甕の出土が報告されているのは、前論で挙げた10遺跡(四手、久徳、木曾、多景島、竹ヶ鼻・品井戸、下之郷、北落、尼子、尼子南、法養寺)、新たに尼子西遺跡で出土が報告され、さらに今回確認した7遺跡(彦根城(城下町)、

松原内湖、妙楽寺、四十九院、在士北、小川原、雨降野)と、あわせて18遺跡において確認できた。

②検討 当地域で出土した犬上型甕については、前論で検討した見解を大きく変えるものではない。以下では、数量的に比較的まとまった出土状況で、且つ時期比定の可能な3遺跡の資料について検討したい。

⁽¹²⁾木曾遺跡J区SD02は、第1層に11から12世紀代の遺物を包含し、第2層には灰釉碗・皿と多量の犬上型甕破片、スサ入り焼土塊や炭化物、数点の椀形滓を包含するものである。⁽¹³⁾第1層では、供膳具は土師器皿・大皿、山茶碗小皿・灰釉陶器碗を中心とし、少量の黒色土器碗を含む。煮炊具は瓦質羽釜が2点出土した。第2層では供膳具はベンガラにより赤彩した回転台土師器坏が主体となり、若干の須恵器坏B、O53形式段階の灰釉碗・皿がこれを補完する構成をとる。煮炊具は、大半は犬上型甕の破片であり、少量の「近江型系小甕」で構成される。また、H区SE1からは、12世紀代の多量の京都系土師器皿と山茶碗小皿・脚付羽釜が出土している。

⁽¹⁴⁾尼子西遺跡SB14掘方からは、ベンガラにより赤彩した回転台土師器坏と犬上型甕の共伴例が報告されている。

⁽¹⁵⁾妙楽寺遺跡において、包含層中からは、K14・K31型式段階の灰釉碗・皿が少量出土していると報告されている。しかし、今回再検討したところ、同層の様相は、供膳具では土師器皿、赤彩した回転台土師器坏を中心とし、10世紀代の灰釉碗・皿、少量の「近江産」緑釉碗と少量の黒色土器碗が補完する状況にあると分かった。煮炊具では犬上型甕が多く、「近江甕系小甕」の破片が見られる。

わずかな例であるが、前論で犬上型甕の分布の中心と位置付けたこの地域は、10世紀を中心に犬上型甕と「近江型系小甕」のセット関係が煮炊具の主流にあると考えておきたい。犬上型甕から羽釜への移行は、木曾遺跡H区SE1を評価するならば12世紀を一つの定点と考え得るにとどまる。

③小結 以上見てきたように、煮炊具は10世紀を中心とする時期に犬上型甕と「近江型系小甕」のセット関係が主流となると考えられる。

(4) 愛知郡

⁽¹⁶⁾①概要 13遺跡出土遺物の一部を実見した。前論で挙げた畑田廃寺遺跡に加え、今回、新たに5遺跡(塔之塚廃寺、野々目廃寺、毛入堂、目加田廃寺、大間寺)において確認できたので、あわせて6遺跡より出土していることになる。毛入堂、目加田廃寺、大間寺の各遺跡からの出土は、包含層資料や表採資料で、いずれも犬上型甕10点前後である。

②検討 ここでは、出土状況の良好な3遺跡について検討する。

塔之塚廃寺では、50点以上の在地産タタキ甕を確認した。その内訳はおおよそ犬上型甕8に対して神崎型甕2の割合であるが、その大半が包含層出土のものである。遺構内での出土が確認できたのは、寺域を画する大溝(A区SD1)と南西門掘方からの出土例である。A区SD1からは、大きく上層と下層に分けて遺物の取り上げがなされている。⁽¹⁷⁾下層からは、多量の瓦とともにK14・K31型式段階からO53型式段階の灰釉碗・皿、黒色土器碗、須恵器坏Bと蓋、須恵器壺M、須恵器甕、回転台土師器坏とともに15点の犬上型甕の破片と「近江小甕系」の破片が出土している。屋瓦類には、軒丸瓦湖東BⅡ・湖東D・湖東F(重岡1997)が見られた。上層には多量の瓦とともに15世紀までの土器が雑多に出土している。また、南西門は調査区内で3間×2間分が確認される掘立柱建物で、掘方に軒丸瓦湖東Dと須恵器坏B、須恵器甕、回転台土師器坏とともに、犬上型甕と「近江型系小甕」の破片が出土している。

野々目廃寺では、50点を超える在地系タタキ甕の破片がおおよそ犬上型甕7に対して神崎型甕3の割合で出土しているが、大半は包含層出土のものである。出土遺構が特定できたのは、A区の瓦溜、寺域を画する南北溝のSD1・SD2の3例である。

A区瓦溜は、遺物の大半を瓦が占められているが、少量の土器が共伴して出土している。出土した土器は、須恵器坏Bと蓋、同甕体部片、灰釉碗(O53型式段階、「近江産」緑釉碗、回転台土師器坏と、18点の犬上型甕、3点の神崎型甕、「近江型系小甕」である。SD1およびSD2についても同様の傾向を示す。

⁽¹⁸⁾畑田廃寺では、80点を超える犬上型甕8に対して

神崎型甕2の割合で在り系タキ甕の破片が出土しているが、大半は包含層出土のものである。出土遺構が特定できたのは、第1地区SD01、第2地区工房2、SK17、SK20、SK21、基壇北面瓦溜、東外I区堅穴住居SB101、AトレンチSD30である。このうち、出土遺物の豊富なSK21と堅穴住居SB101について検討を行いたい。

SK21では、須恵器坏A・B・Gと坏蓋・碗・皿・鍋・壺G・L、緑釉陶器耳皿、回転台土師器坏の出土が報告され、遺構の性格は、連続する土抗SK22・23とともに塵芥処理用土坑とされる。管見では、出土遺物中に須恵器小型盤・K14・K31型式段階の東海産緑釉皿・灰釉碗が少量と、O53型式段階の灰釉碗、多量の回転台土師器坏、10点を超える犬上型甕の破片と、「近江型系小甕」の破片が多数見られた。報告者は須恵器坏蓋(坏Hに伴う蓋)と須恵器坏Bを評価して、土坑群の埋没年代を7世紀後半に求めているが、かような遺物の出土状況からみて10世紀前半に求めるのが妥当であろう。土坑から大量に出土した瓦の年代観からも、この見解がより適したものといえる。

次に、堅穴住居SB101について検討する。報告では、須恵器坏Aの出土をもって、7世紀第4四半期に位置付けている。しかし、カマド前床面出土の須恵器坏蓋・犬上型甕・「近江型系小甕」、および住居跡内北よりある土坑出土のK31型式段階の灰釉皿・犬上型甕・「近江型系小甕」の出土から、本遺構の埋没時期は9世紀後半に求められると考える。遺構埋土中からは須恵器坏A・Bが少量と、O53型式段階の灰釉碗、回転台土師器坏、犬上型甕、「近江型系小甕」が出土している。

他に注目すべき資料としては、遺構名不明の土坑から「南河内型甕」と神崎型甕・土師器高坏・回転台土師器坏・黒色土器坏の一括出土例があげられる。また、包含層資料中に、「南河内型甕」の破片を少量と、回転台成形の甕1点が見られた。

以上の状況から、畑田廃寺における煮炊具は、9世紀後半から犬上型甕と「近江型系小甕」を主流としたもので、神崎型甕と「南河内型甕」等の搬入土器がこれを補完する状況を想定できる。

③小結 3遺跡について出土土器を概観したが、

いずれの遺跡も古代寺院あるいは豪族居館に比定される遺跡である。煮炊具に比して供膳具が比較的多い状況は、遺跡の性格に起因する可能性がある。ここでは、いずれの遺跡においても10世紀における煮炊具の中心は犬上型甕と「近江型系小甕」のセットであり、これを神崎型甕が補完するものであった。畑田廃寺の事例から、これら煮炊具の出現時期を9世紀後半に求めるのが現時点では妥当である。

以上のような状況は愛知郡全域に一般化できるものだろうか。実見した資料においては、概ね同様の傾向を示している。しかし、資料的な制約もあるため、ここでは上記の傾向を指摘して今後の調査研究に委ねたい。

(5) 神崎郡

①概要 22遺跡出土遺物の一部を実見した。⁽¹⁹⁾前論で挙げた出路遺跡に加え、今回、新たに12遺跡(斗西、鉢光寺、伊庭(高木)、南須田(五十)、中沢、建部日吉、建部大塚古墳群、建部城、浅前、建部北町古墳群、建部下野、川合寺)において出土しており、あわせて13遺跡において出土を確認できたこととなる。なお、建部日吉、建部大塚古墳群、建部城、浅前、建部北町古墳群、建部下野の各遺跡は、古墳時代後期から中世の遺構が重複する状況にあるため、本論ではこれを「建部遺跡群」と呼称する。

神崎郡西半(現在の能登川町域)の5遺跡と、前論であげた出路遺跡は、いずれも犬上型甕の細片が出土したものである(実見資料では、神崎郡西半の煮炊具は、8世紀代は「近江型系甕」が主流となっている。9世紀代も同様に「近江型系甕」の煮炊具が主流となるが、若干量の「湖南系甕」が含まれるようである)。出土を見た犬上型甕は、出土点数から見て客体的なものであると考えている。また、川合寺遺跡では数点の神崎型甕細片を確認したものの、いずれの遺跡も出土状況にも恵まれないため、ここでは資料確認を報告するに留める。以下では、建部遺跡群について検討したい。

②検討 建部遺跡群において、神崎型甕の出土は報告例はない。しかし、今回50点を超える出土例を確認できた。ただし、出土遺構や出土状況が不明であるため、甕の形状や分布状況は、管見の範囲内の傾向を述べる。

神崎型甕は、型式設定の項で述べたように、全体の約2割程度を体部内面に同心円状の当て具痕跡が残るものが見られる。また、確認できた口縁部は約10点で、いずれもかるく受口状を呈し、口径は約20cmである。破片資料からは、全体形状は短胴あるいは中胴形とみられる。胎土中に金雲母を含み、色調は淡褐色あるいは褐色を呈するものである。また、底部を3点のみ確認したが、黒斑を有するものが2点見られた。体部に黒斑を有するものが見られなかった点から、焼成は縦置きと考えられる。

他の煮炊具については、「近江型系甕」が数量的に過半を占め、このほかに、美濃産かと思われる土師器甕が報告されている。

前述のとおり、7世紀から16世紀までの遺物が混在し、且つ出土状況も不明であるので、周辺地域における研究成果から類推して煮炊具の状況を整理しておく。8世紀代は、「近江型系甕」が主流を占め、9世紀後半代から「神崎型甕」へと移行しているが、「近江型系甕」も併存する可能性が残る。「湖南系甕」については、後述する湖南地域での検討結果から考えて、8世紀から9世紀のものと思われるが、破片数から見て、いずれの時期においても煮炊具の主流を成すものではない、と考える。

神崎型甕の消滅期についても資料から時期を断定するのは難しい。報告書からは、建部城遺跡2 T S E 1や4 T S D 8などで見られるように、京都系土師器皿と近江産黒色土器碗が供膳具の主流となる時期には煮炊具は羽釜が主流となっている。今回実見した資料でもこの状況は肯定できるので、11世紀代の中に神崎型甕の消滅時期を想定するのが妥当であろう。

③小結 神崎郡は、現時点での資料から見て、9世紀後半以降において煮炊具が建部遺跡群と神崎郡西部では、その様相を異にする。建部遺跡群では、8世紀代の「近江型系甕」から、神崎型甕への大きな変換がみられた。そこには技術的な断絶が見出せるが、愛知郡でみたように、神崎型甕に小型に器種が見られない点からは、小型の甕については前代の系譜を引くものが主流であるといつても良いかもしれない。一方で、神崎郡西部は8世紀代から9世紀代で煮沸具の大きな変化が見られなかった。ここに客

体的に犬上型甕が見られる点に注目しておきたい。

(6) 蒲生郡

①概要 47遺跡出土遺物の一部を実見した⁽²⁾。前論で挙げた金剛寺遺跡、御所内遺跡、森ノ前遺跡に加え、今回、新たに6遺跡(馬淵、千僧供古墳群、榎木立、千僧供廃寺、浅小井、内野)において確認し、あわせて9遺跡において出土を確認できた。浅小井、馬淵の両遺跡からの出土は、包含層資料や表採資料で、いずれも犬上型甕10点前後である。また、金剛寺遺跡と御所内遺跡では、出土量の増加を見たが、包含層資料や表採資料であった。以下で出土量の多い例について検討する。なお、千僧供古墳群、榎木立、千僧供廃寺、勸学院の4遺跡は重複したもので、千僧供遺跡群として検討する。

②検討 千僧供遺跡群ではかなりまとまった量の犬上型甕が出土している。また、包含層出土資料ではあるが、犬上型甕が3点確認できた内野遺跡を蒲生郡内での比較対象として検討したい。

千僧供遺跡群は弥生時代から近世の複合遺跡である。一部の資料が報告されているが、今回実見できたものは、その中に含まれない包含層出土の資料である。ここでは、実見した印象を述べる。出土資料のうち古代の煮炊具は、「近江型系甕」および小甕が点数的には最も多く、犬上型甕が約50点出土している。周辺の遺跡において、8世紀代の煮炊具は「近江型系甕」が主流となることが判明しているので、これを勘案すると9世紀以降に犬上型甕が用いられたものと推定できる。また、報告書において京都系土師器皿と羽釜の共伴例が多く報告されており、土師器皿の年代観から12世紀には煮炊具の主流を羽釜が占めることが確認でき、この状況は今回の検討による印象と整合する。この状況は、11世紀代まで溯るものと見られ、報告書においても11世紀代の京都産系土師器皿と羽釜の共伴例が数例報告されていることと合わせて考えると、当遺跡群における羽釜の出現時期を11世紀代に求めるのが妥当であろう。

また、8世紀代後半から9世紀初頭にかけても、近隣の老蘇遺跡や金剛寺遺跡、内野遺跡などで「近江型系甕」の出土例が見られる点を参考例としてあげておきたい。

かような状況から、消去法的に考えると、千僧供

遺跡群においては、9世紀から10世紀にかけて、「近江型系甕」と犬上型甕が共存した、と想定しておきたい。

内野遺跡は8世紀前半代から出現する遺跡で、大型の倉庫群や道路状遺構が検出されたことで著名な遺跡である。⁽²³⁾8世紀代には竪穴住居が散在する状況で、出土資料から「近江型系甕」が煮炊具の主流であることが、S H 303やS H 412、S H 629出土資料によって確認できる。9世紀代および10世紀代においては、S X 06、S B 007、S D 664、S B 520出土資料から判断して、この傾向は大きくは変化しないと見られる。これに対して、S K 224に見られるように、若干量の「南河内型甕」の出土を見ており、客体的に他地域の煮炊具が補完していたものと考えられる。今回、出土を確認した犬上型甕も、同様の位置付けができる。

当遺跡において「近江型系甕」の消滅期を明確に知ることはできないが、S K 468出土資料を評価するならば、12世紀には煮炊具の主流は羽釜へと変化したと見られる。

③小結 2つの遺跡について検討したが、特に内野遺跡で見られた状況は、他遺跡の状況と似通ったものであり、蒲生郡の全体的な傾向を示すものと言える。逆に、千僧供遺跡群でのあり方は、当地域の中では特異なものとして評価できよう。

(7) 野洲郡・栗田郡・志賀郡

①概要 54遺跡出土資料の一部を実見した。⁽²³⁾が、遺跡数に対して実見した資料は各遺跡数箱程度であり他地域の実見資料数に比して少ない。

当地域で在地産タタキ甕の出土報告例はない。今回、木部天神前古墳で3点、久野部遺跡で2点、赤野井遺跡で5点と北大津遺跡で3点、犬上型甕を見出した。いずれも包含層出土資料で、同層中には他の時代の遺物との混入が顕著であり、さらに検討を加えるのは難しい。ここでは、畑中氏の研究成果(畑中1996b)と追認できるものであったこと、栗太郡では9世紀代まで8世紀代の傾向が継続する可能性があること、野洲郡においては9世紀代には栗太郡の煮炊具の影響がおおよそ印象を持つこと、錦織遺跡などで球胴形の甕を数点確認したことを付け加えるに留めておきたい。

以上の状況から、確認できた犬上型甕は、搬入されたものと想定しておきたい。

(8) 高島郡

①概要 高島郡において16遺跡出土資料の一部を実見したが、⁽²⁴⁾遺跡数に対して実見した資料は各遺跡数箱程度と他地域に比して少ない。在地産タタキ甕の出土が報告されているのは、正伝寺南遺跡と堀川遺跡、中ノ坊遺跡⁽²⁵⁾である。正伝寺南遺跡では、高島型甕が9世紀代の煮炊具の主流として報告されている。また、中ノ坊遺跡では、高島型甕と犬上型甕の出土が数点報告されている。報告されている正伝寺南遺跡と中ノ坊遺跡で出土点数の増加を見るとともに、新たに井ノ口遺跡で犬上型甕と高島型甕を1点ずつ確認した。また、堀川遺跡では報告例以外に在地産タタキ甕の出土例は確認できなかった。

②検討 中ノ坊遺跡と井ノ口遺跡は、実見できた遺物がコンテナ1箱ずつと少量であり、且つ出土状況に恵まれないので、詳細な検討は困難である。以下では正伝寺南遺跡について検討を行いたい。

正伝寺南遺跡において、8世紀代の煮炊具は「近江型系甕」のみならず「湖南系甕」など、多様な土器が報告されている。実見資料は包含層資料が中心となった。その結果、煮炊具の主流は「近江型系甕」が占める印象を持った。9から10世紀代については、報告されているS D 10・S K 27の資料は実見できなかった。ただし、実見した包含層資料では、当該期の資料自体が少ないものの、供膳具は回転台土師器坏が主流であり、「近江産」緑釉碗・皿と無釉陶器碗・皿および少量のO 53型式段階の灰釉碗の出土を見た。同層の煮炊具の中心が高島型甕であるが、「北陸系甕」や「近江型系甕」の破片点数も一定量見られた。

以上から、9世紀後半から10世紀にかけて、当遺跡では高島型甕が煮炊具の主流となり、「北陸系甕」や「近江型系甕」がこれを補完したもの、と想定しておきたい。

実見資料からは、高島型甕の製作技法は犬上型甕とほぼ同様にあると考えたが、成形に平行タタキを用いる点が異なる。8世紀代の主流を成す近江型甕とは、技術的連続性は見出せない。

③小結 正伝寺南遺跡を中心に検討したが、高島

型甕の分布は大きくは広がらないと見られる。8世紀代に「近江型系甕」が煮炊具の主流となったのち、「北陸系甕」がこれに変わる遺跡が多い印象を受けた。高島郡においては9世紀後半代に煮炊具の変化が起こり、一部で高島型甕が主流となった、と判断するのが妥当であろう。

4. 現時点でのまとめ

(1) 分布状況からの検討

分布状況を理解するために、分布図(図5)と分布傾向を示す表(表4)および図(図6)を作成した。表4および図6は、古代末においても「近江型系甕」あるいは同小甕を継続して使用する地域が多いため分布が突出して見えること、湖南地域の3郡を一括したため、「湖南系甕」の分布が限定される傾向が強調されている点を除き、概ね近江における古代末の煮炊具の様相を端的に示すものである。

伊香型甕は井口遺跡群を中心に、非常に限定的な分布状況を示す。同様に、高島型甕も、分布の中心は不明ながら、分布域は高島郡の一部に限られ、非常に限定的な分布状況を示す。

神崎型甕は、建部遺跡群を中心に分布するが、分布域が神崎郡全体に広がらず、郡域を越えて愛知郡東半部へと広がる点は注目される。しかし、やはり分布域は限定的であると評価できる。

犬上型甕の分布状況は、他型式の甕に比して明らかに違った傾向を示す。分布の中心は犬上郡東半に求められるが、県内のみならず、近江で生産されたタタキ甕のなかで唯一、山城や大和での出土例が報告されている分布状況は、特異なものと評価できる。以下では犬上型甕の分布状況について、さらに検討を加えたい。

犬上型甕は、犬上郡で煮炊具の主流となるばかりでなく、愛知郡東半においても同様の状況を示す。しかし、他地域においては客体的なものであり、その分布は偏在している。

千僧供遺跡群をはじめ、蒲生郡では御所内遺跡など、推定東山道に近い立地の遺跡での出土例が見られる。愛知郡東半や法勝寺遺跡や久野部遺跡での出土例も、こうした陸上交通との関わりで理解できる。

一方、犬上郡の琵琶湖に近い遺跡である妙楽寺遺

跡や松原内湖遺跡からの出土点数が多い点に注目したい。妙楽寺遺跡は宇曾川の河口部に位置し、16世紀を中心に「港湾都市」として繁栄したことで著名である。古代末においても、宇曾川あるいは内湖を介して琵琶湖に繋がる立地にあったと推測される。古代末における同遺跡の評価は定まっていないが、9世紀後半から10世紀には、多量の東海産施釉陶器が出土しており、後代にみられる港湾機能を有した可能性が高い。松原内湖遺跡も多量の東海産施釉陶器や皇朝銭の出土が見られ、内湖を介して琵琶湖の水運と繋がる港湾機能を有する遺跡である⁽⁷⁾。

今西遺跡、早崎遺跡、出路遺跡、伊庭(高木)遺跡、南須田(五十)遺跡、浅小井遺跡、木部天神前古墳、赤野井遺跡、北大津遺跡と、琵琶湖に内湖や小河川で繋がる遺跡において、少量ではあるが犬上型甕の出土例が見られる点は、湖上水運との関連性において理解するのが妥当であろう。犬上郡と琵琶湖の対岸にあたる高島郡において出土例が見られるのも、湖上水運との関連性を無視しては理解しがたいものである。

以上のように、犬上型甕は分布の中心域から離れるに従い減少する傾向にあり、且つ湖岸部や主要交通路に隣接した遺跡での出土例が多い事実をどのように評価すべきであろうか。

以上の分布状況を解釈するならば、犬上型甕は、「商品」として流通した可能性を想定するのもあながち無理ではないと考える。

(2) 煮炊具の組成からの検討

ここで、在地産タタキ甕が出土した遺跡における煮炊具の様相を整理しておきたい。

伊香型甕は、井口遺跡群において煮炊具の主流となるが、口径がほぼ同じながら長胴形で平底の「北陸系甕」と共存している。さらに、小甕が煮炊具に加わり、周囲の遺跡よりも器種が豊富である。

神崎型甕は、建部遺跡群において煮炊具の主流となるが、ほぼ同じ口径の「近江型系甕」と共存しており、「近江型系小甕」を加えた煮炊具の器種は比較的豊富である。

高島型甕は、正伝寺南遺跡において煮炊具の主流を成すが、ここでも口径のほぼ同じながら長胴形で平底の「北陸系甕」と共存している。

表2 8世紀代～9世紀前半の各郡別の様相

	伊香・浅井郡				坂田郡		犬上郡		愛知郡		神崎郡		蒲生郡				野洲・栗太・志賀郡		高島郡	
	井口遺跡群		その他		主	従	主	従	主	従	主	従	千僧供遺跡群		その他		主	従	主	従
	主	従	主	従									主	従	主	従				
甕	近江系	×	近江系	×	近江系	鍔釜	近江系	×	近江系	×	近江系	×	近江系	×	近江系	湖南型	湖南型	×	近江系	×
小甕	近江系	×	近江系	×	近江系	×	近江系	×	近江系	×	近江系	×	近江系	×	近江系	×	湖南型	×	近江系	×

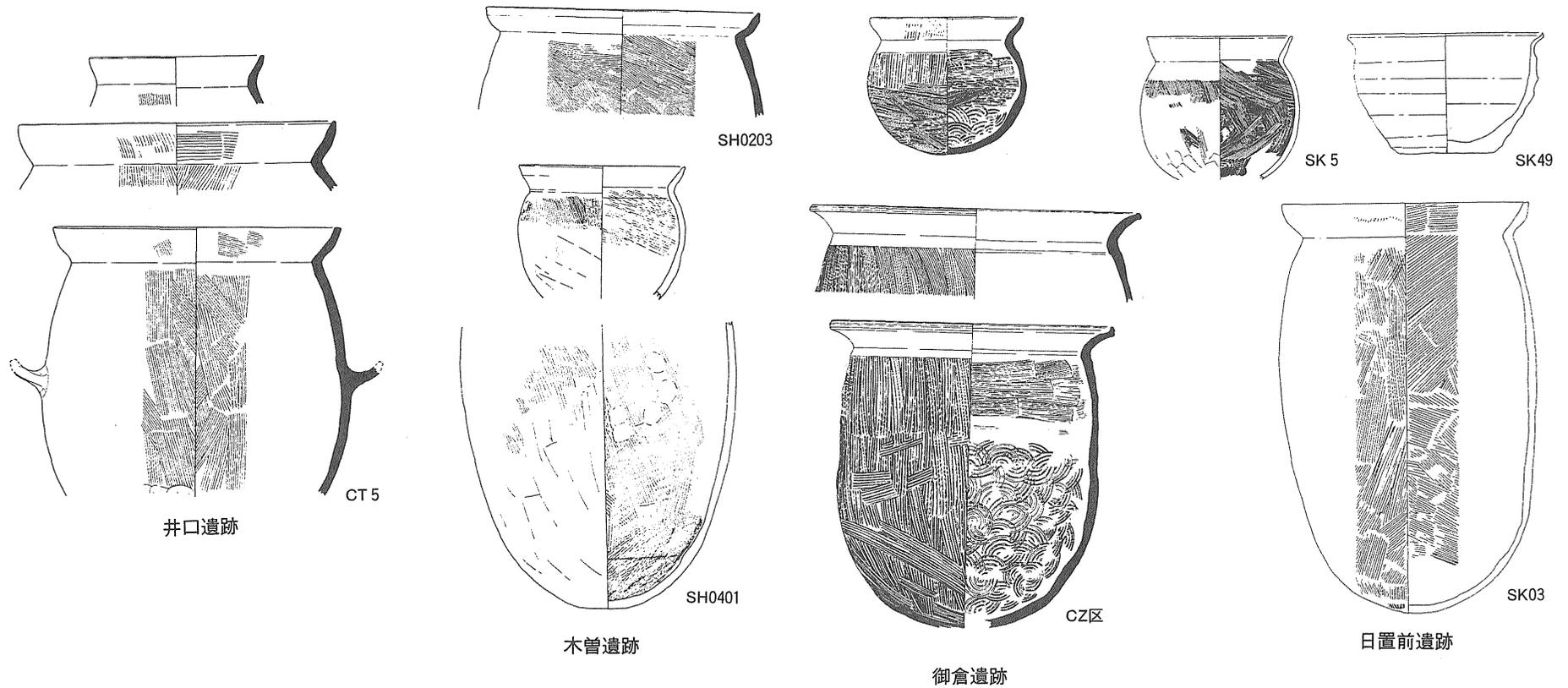


図3 8世紀から9世紀前半の煮炊具

表3 9世紀後半～10世紀代の各郡別の様相

甕	伊香・浅井郡				坂田郡		犬上郡		愛知郡		神崎郡		蒲生郡				野洲・栗太・志賀郡		高島郡	
	井口遺跡群		その他		主	従	主	従	主	従	主	従	千僧供遺跡群		その他		主	従	主	従
	主	従	主	従									主	従	主	従				
甕	伊香型	?	北陸系	犬上型	北陸系	坂田型・犬上型	犬上型	×	犬上型	神崎型・湖南型・南河内型	神崎型	近江系	犬上型	近江系	近江系	×	湖南型	犬上型	北陸型	高島型・犬上型
小甕	伊香型	?	近江系	?	近江系	×	近江系	×	近江系		近江系	×	近江系	×	近江系	×	湖南型	×	北陸型	×

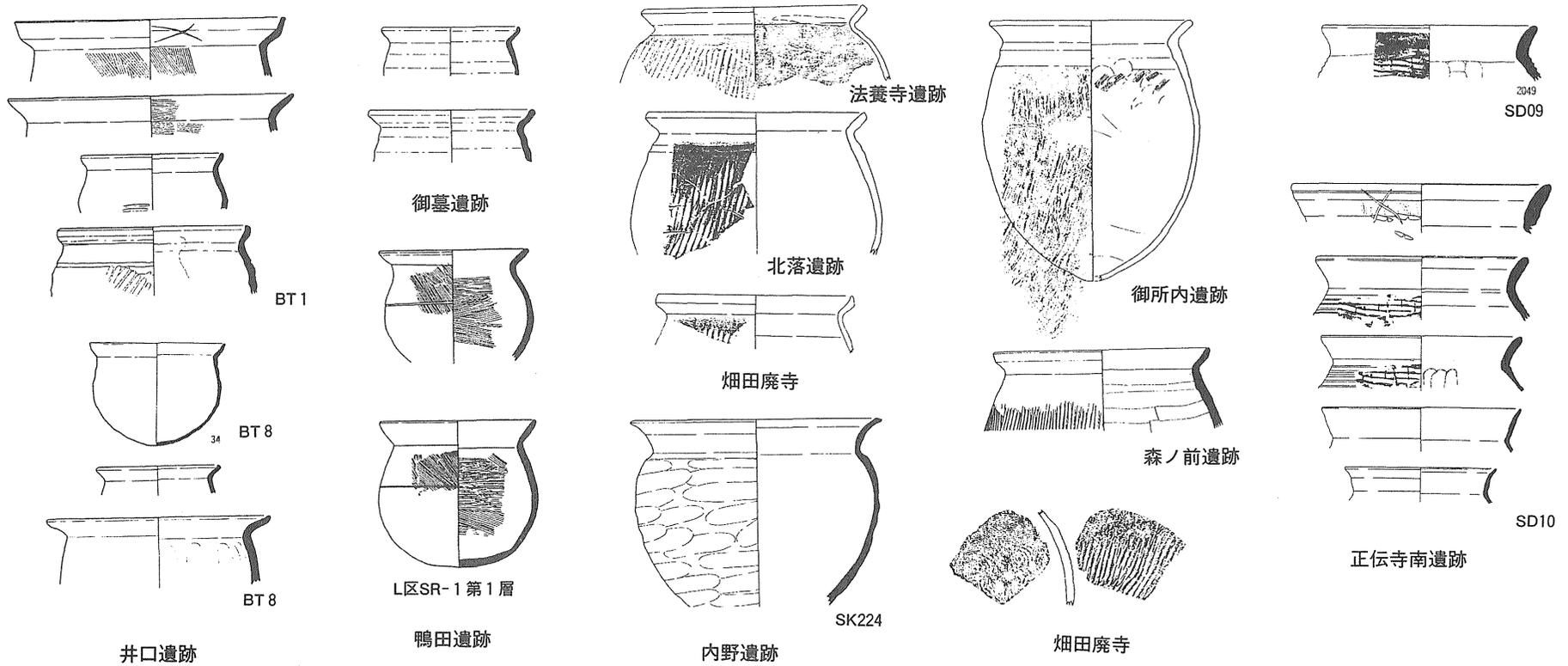


図4 9世紀後半から10世紀の煮炊具

犬上型甕が搬入された地域においても、系譜の異なる煮炊具との共存が確認できる。愛知郡東半においては、犬上型甕が煮炊具の主流を成すが、ほぼ同形の神崎型甕と短胴形の「南河内型甕」がこれを補充し、「近江型系小甕」で煮炊具が構成されている。1点のみだが、これに美濃産の可能性のあるロクロ成形の甕が見られることから、さらに長胴・中胴形の器種が増加する可能性があり、煮炊具の器種は豊富である。

千僧供遺跡群は、犬上型甕が主流となるものの、口径がほぼ同じ「近江型系甕」がともに用いられ、小甕を加えると煮炊具の器種が地域内では豊富であると判断できる。

これとは反対に、犬上型甕は「近江型系小甕」とのセット関係が、分布の中心にある犬上郡東半において、ほぼ煮炊具の全体を占める可能性が高い。

以上から、在地産タタキ甕が一定量みられる遺跡においては、煮炊具の器種が地域内で豊富な例が多い、と判断できる。そうした状況の中で、犬上郡東半は、煮炊具において特異な例と認識できる。

煮炊具の器種構成からどういったことが分かる得るのかについては、同地の土器様相全体の中で評価されるべきものである。以下では、古代末に前代の煮炊具と技術的連続性を持たず、突如として出現する在地産タタキ甕を解釈するために、さらに視野を広げて検討して行きたい。

(3) 製作技法からの検討

製作技法については、各型式とも成形にタタキを用いる点を評価し、前段階と異なったものと評価した。しかし、「近江型系甕」と「湖南甕」は、底部の成形に部分的にタタキを用いる点を考えるならば、成形に用いるタタキをもって技術的な断絶と評価した本論は、多分に予察的なものである、とせねば成らない。

焼成方法については、前代の「近江型甕」が縦置き開放窯で焼成された可能性が畑中氏によって指摘されている。私も実見資料から、この見解を支持する。在地産タタキ甕のうち、実見において焼成方法が断片的ながら伺えるのは、犬上型甕と神崎型甕のみである。

犬上型甕は、今回検討した資料中でも、体部に黒

斑が見られるものが少量ながら確認できた。前論で指摘した、横置き焼成の可能性が高いといえる。

一方、神崎型甕は、前述したように少数ながら底部に黒斑の見られるものがあつた。これは、焼成方法が「近江型甕」と同様のものである可能性が考えられる。

以上、在地産タタキ甕を前代の甕と比較しながら整理したが、古代における煮炊具の製作技術は改めて検討が必要である事実を記しておきたい。

(4) 他地域における在地産タタキ甕との比較

丹波・丹後・但馬において在地産タタキ甕の出土が報告され、9世紀代の所産とされている(原山1996)。同時期の煮炊具は多様性に富むことが指摘されているが、各地域ごとの煮炊具の器種については整理されているものの、それぞれの系譜や出土量、搬入関係については整理が行われていない。

播磨においては、池田征弘氏の研究によれば(池田1996)、10世紀前半代に「在地産タタキ甕」が東播磨北部に出現するが、これは前代の煮炊具と技術的な連続性は見出せないものとされる。また、これと同時期に、在地産のタタキ成形の羽釜がみられ、両者は共存関係にあるとともに、地域内での中心的煮炊具となっている。

讃岐では、四国全般を対象とした佐藤竜馬氏の研究(佐藤1996)によれば、在地産タタキ甕(文中では鍋)は12世紀に羽釜とともに出現する、「中世的な器種」と位置付けられ、近江の例とは時期的に大きく隔たるものである。

平安京における煮炊具については、小森俊寛氏の研究(小森1996)、三好美穂氏の研究(三好1996)によると、長岡京において若干の「タタキ甕」が見られるが、量的に増加を見るのは平安京に遷都してからである。「タタキ甕」の中にも様々な器形がみられるとともに、その他の成形技法による甕にも様々な器形が見られ、おおよそ9世紀代を通じて見られるようである。

他地域について概観してきたが、近江に比較でき得る資料は見出せなかった。強いて言うならば、近江における在地産タタキ甕の形状は、前代の在地のものよりも平安京に類似する傾向がある、と想定できる。

凡例 51~ 21~50 11~20 1~10



伊香型 坂田型 犬上型 神崎型 高島型

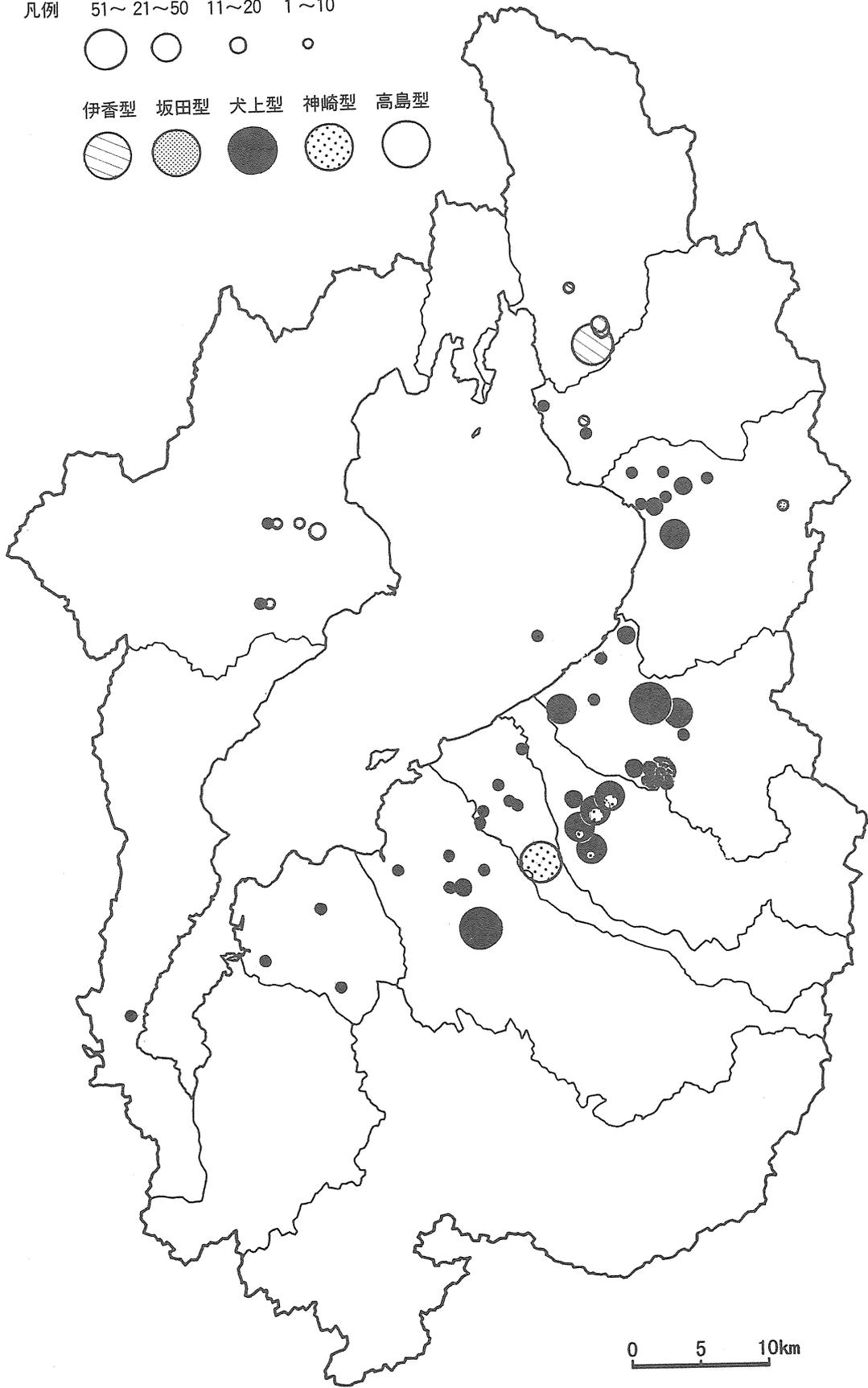


図5 近江における在地産タタキ甕分布図

表4 在地産タタキ甕の型式と出土地域

	伊香・浅井郡	坂田郡	犬上郡	愛知郡	神崎郡	蒲生郡	野洲・栗太・志賀郡	高島郡	計
北陸系		1						1	3
伊香型	1								1
坂田型		1							1
犬上型	0.5	0.5	1	1		1	0.5	0.5	5
神崎型				0.5	1				1.5
近江系	0.5	1	1	1	1	1			5.5
湖南型					0.5		1		1.5
高島型								0.5	0.5
計	3	3.5	2	2.5	2.5	2	1.5	2	

凡例：主力器種1点、客体的ではあるが存在するもの0.5点として算出した。

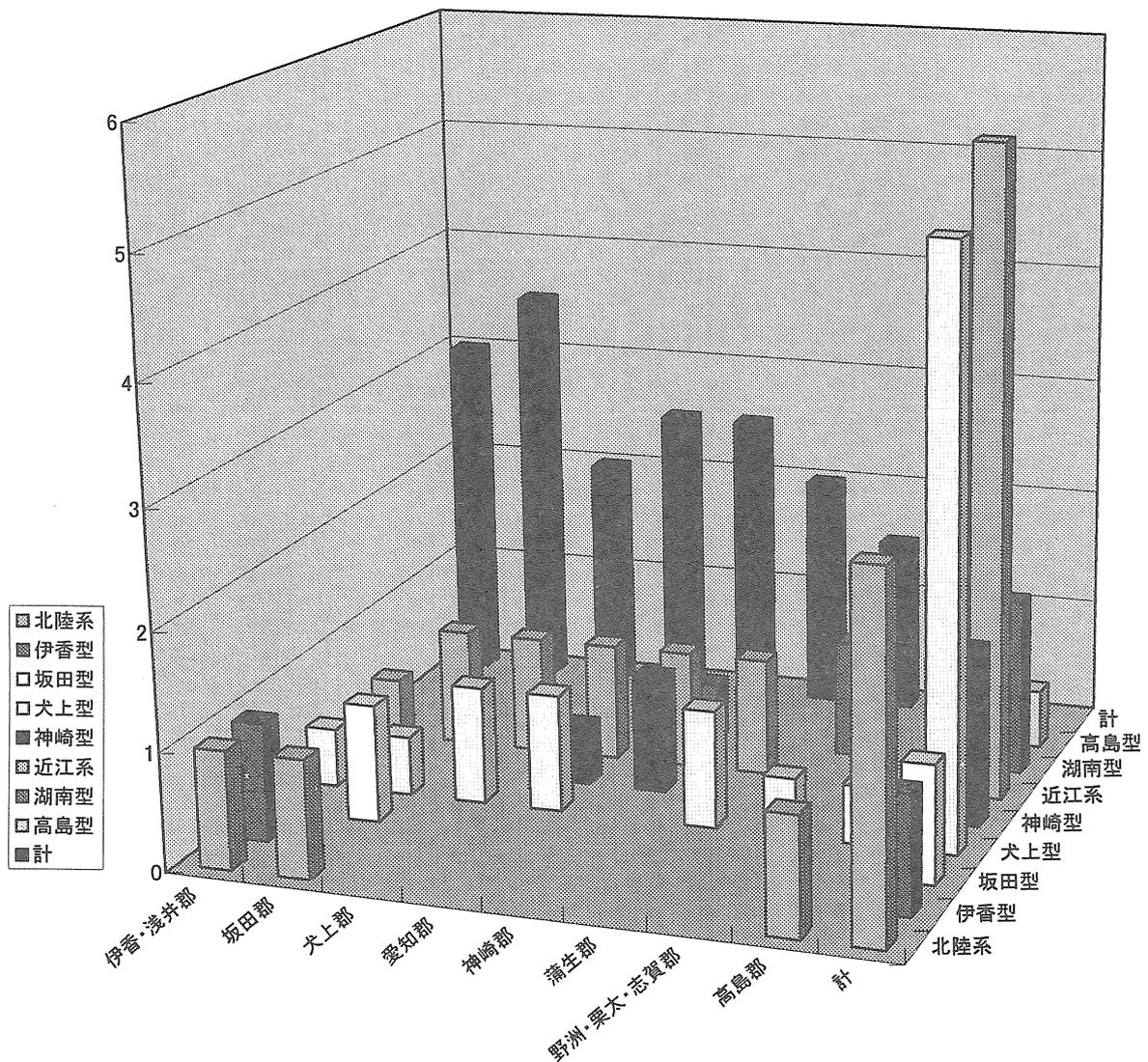


図6 古代末における近江の煮炊具分布図

本稿でいい得ることは、近江において煮炊具の多様性を見出したが、これが前代と連続しない点を評するならば、やはり外部地域からの技術的影響を受けたと考えるのが自然であろう。他地域を概観した中では、その候補として平安京を想定するのが現時点では妥当であろう。

5. おわりに

以上の検討の結果を整理するならば、4点に要約できる。

① 古代末の近江に出現する在地産タタキ甕は、現時点では伊香型・坂田型・犬上型・神崎型・高鳥型の5種に大別でき、9世紀後半から10世紀の所産である可能性があること。

② それぞれ前代の煮炊具と技術上の断絶が見られる可能性があること。

③ 伊香型・坂田型・神崎型・高鳥型は限定的な分布状況にあり、地域内で他の煮炊具と共存関係にあること。

④ 犬上型甕は、分布の中心域での煮炊具の様相が他型式のものとは異なるとともに、分布状況も大きく異なること。

以上にまとめられるが、小地域での土器様相の整理という基本的な作業も必要である、との認識で本論を執筆した。

前論執筆後、「甕の破片一つで何が分かるというのか」という叱責を受け、私自身、大いに考え込むところがあった。そんな中、「何とか再収納業務の研究面からの成果を」との要望を受けて、急遽本論に取り掛かることとなった。「できるだけ多様な視点から」と意気込むうちに、当初予定していたより取り止めのない長文となってしまった。本来記すはずであった再収納業務で気付いた問題点を述べておきたい。本論中で多用した「包含層」資料であるが、便利な概念のせい、安易に用いられすぎているようである。「包含層」にも様々な形成過程が想定でき、その性格にあった調査方法を慎重に選択すべきである。また、本論の対象とした年代は、少なくとも近江においては施釉陶器に依拠する傾向があり、これを検証する他の要素がほとんど見受けられない。ゆえに、細片資料も含めた慎重な年代比定が必要

である。土師器甕は、使い古されれば碎けて壊れて、捨てられるものだから、なお更である。

末筆ではありますが、本論執筆に多大なご支援をいただいた辻川哲朗氏、藤崎高志氏、畑中英二氏、田中勝弘氏、小島孝修氏、神保忠宏氏、稲垣正宏氏の諸氏と、再収納第3期の諸氏に深く感謝の意を記して本論を締めくくりたい。

(しげおか たく：調査普及課主任技師)

註

(凡例：滋賀県教育委員会→県、財団法人滋賀県文化財保護協会→協会 参考文献・参考文献も同じ)

- (1) 井口、柏原、柏原北、桜内、保延寺、大海道、華寺、黒田長山古墳群、黒田長野古墳群、法光寺、西阿閉、唐川、坂口、黒田B、岩熊B 以上伊香郡 岡の腰古墳、浄土寺、丁野、四郷崎、北野A、留目、早崎、満願寺、南浜、尾上、今西、五村、莊厳寺 以上浅井郡。
- (2) 田中勝弘氏の御教示による
- (3) 県・協会 国道365号バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ
- (4) 報告中では、第10期から第13期の年代観は、須恵器中心に行っていたことが記載されている。しかし、当該時期の施釉陶器の研究成果(檜崎1973)の影響がある観はぬぐえない。第14期以降は全面的に檜崎彰一氏の研究に依拠して時期比定を行っている
- (5) 東良・北方田中、上平寺、寺林、入江内湖、入江内湖西野、三大寺、法勝寺、狐塚、長沢、世継、寺倉、塚の越古墳、西円寺、豊公園湖岸、大辰巳、室、永久寺、大戌亥、鴨田、高橋南、高橋、宮司、大東、今川館、今川城、今川東、十禅師、越前塚、森前、榎木百坊、国友、新庄馬場、十里、川崎、春近、堀部西、柿田、南小足、今川南、垣籠、上寺地、北郷里、北郷里小
- (6) は場整備関連遺跡発掘調査報告Ⅶ-2 1980 県・協会 田中勝弘氏の御教示による
- (7) 長浜新川中小河川改修事業に伴う発掘調査報告書Ⅳ大戌亥遺跡Ⅰ・鴨田遺跡Ⅲ-2 1996 県・協会 採集資料として報告されている
- (8) 坂田型甕の成立の可否は今後の課題としたい。
- (9) 長浜新川中小河川改修事業に伴う発掘調査報告書Ⅴ大戌亥遺跡Ⅱ・鴨田遺跡Ⅳ 1997 県・協会
- (10) 田中氏の御教授によるが、管見ではこの状況を確認できる資料が得られなかった。
- (11) 彦根城(城下町)、松原内湖、山之脇、妙楽寺、肥田城、八坂東、四十九院、在士北、下之郷、尼子南、尼子、尼子西、小川原、金屋、金屋南古墳群、勝楽寺、外輪古墳群、

- 雨降野、北落、法養寺、木曾、敏満寺西、久徳
- (12) 赤田川単独河川改修に伴う発掘調査報告書 木曾遺跡
1999 県・協会
- (13) 筆者が調査を実施したが、諸般の都合により十分な報告
を為し得なかったため、ここで補足説明を加えておく。
- (14) ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 X X V - 2 尼子西遺跡
2 1998 県・協会
- (15) 宇曾川災害復旧助成事業に伴う 妙楽寺遺跡Ⅲ 1989
県・協会
- (16) 稲里、薩摩、屋中寺廃寺、下岡部、大日溝、元持、菩提
寺、塔之塚廃寺、毛入堂、目加田廃寺、大間寺、野々目廃
寺、畑田廃寺
- (17) 報告との対応関係は不明(ほ場整備関係遺跡発掘調査報
告書Ⅵ-4 1979 県・協会)
- (18) ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ-5 1979 県・協
会
- (19) 普光寺、芝原、出路、一色城、莊厳寺、殿屋敷城、石馬
寺、斗西、柿堂、鉢光寺、宮の前、小川、伊庭(高木)、南
須田(五十)、中沢、建部日吉、建部大塚古墳群、建部城、
浅前、建部北町古墳群、建部下野、川合寺
- (20) 辻野、馬淵、勸学院、千僧供古墳群、榎木立、千僧供廃
寺、倉橋部、梅ノ木、大手前、上出A、御所内、上下、川
ノ口、柿木原、金剛寺、後川、黒橋、八甲、高木、浅小井、
柴原南、黒丸、上出B、慈恩寺、中屋、小中、老蘇、観音
寺城、観音寺城下町、内野、外広、麻生、堂田、アリヲジ
、蒲生堂、市子、杉ノ木、竹ノ鼻、蛭子田、野田道、風
呂流、森西城、五斗井、北代、十禅師、西明寺、堤ヶ谷
- (21) 白鳥川改修工事関連遺跡調査報告3 千僧供廃寺遺跡発
掘調査報告書 1991 県・協会
- (22) ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 X X IV - 4 内野遺跡
I 1997 県・協会 ・同 X X V - 3 内野遺跡Ⅱ 1998
県・協会
- (23) 小比江、湯ノ部、比留田、木部天神前古墳、木部、虫生、
八夫、五条、六条、江部、中北、北村、三堂、富波、久野
部、五之里、吉身西、横江、金森西、欲賀、欲賀西、山賀、
杉江、今市、靈仙寺、高野、狐塚、小野、椿山古墳、上鉤、
北谷古墳群、大將軍、木瓜原、笠山、赤野井、烏丸崎、横
尾山古墳群、溝ノ尾、中路、惣山、瀬田廃寺、野畑、近江
国府、上田上牧、勝華寺、嶽古墳、穴太野添古墳群、穴太、
穴太銅込古墳群、滋賀里、北大津、錦織、南郷、崇福寺
- (24) 海津B、薬師堂、仏性寺、弘川B、日置前、妙見山、コ
クリウウ寺、井ノ口、下五反田、出鳴、中ノ坊、堀川、針
江浜、針江北、新庄城、正伝寺南
- (25) 一般国道161号線(高島バイパス)建設に伴う新旭町内遺
跡発掘調査報告書Ⅰ 正伝寺南遺跡 県・協会 1990
- (26) ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅴ 県・協会 1978

(27) 『内湖と生きる』松原内湖展」展示パンフレット
1993 協会

引用文献

- 池田征弘「摂津西部・播磨」「近江」古代の土器4 煮炊具
(近畿編) 1996 古代の土器研究会編
- 尾野善裕「黒笹第11号窯発掘調査報告書」三好町教育委員会
1992
- 尾野善裕「猿投窯と西三河の窯跡」第1回三河考古合同研究
会 三河考古刊行会 1997
- 北野博司「古代北陸の煮炊具」古代の土器—律令的土器様式
の西・東4 煮炊具 1996 古代の土器研究会編
- 小森俊寛「総説」・「各地の煮炊具Ⅱ大和・山城・近江 概
説」古代の土器4 煮炊具(近畿編) 1996 古代の土器研
究会編
- 小森俊寛「近畿北部の煮炊具—但馬・丹後・丹波・山城・大
和・近江・伊賀・伊勢・志摩—」古代の土器—律令的土器
様式の西・東4 煮炊具 1996 古代の土器研究会編
- 檜崎彰一「陶磁大系5 三彩・緑釉」1973 平凡社
- 佐藤竜馬「四国の煮炊具」古代の土器—律令的土器様式の
西・東4 煮炊具 1996 古代の土器研究会編
- 重岡卓「『いわゆる甲良甕』に関する基礎的研究」 滋賀県
文化財だよりNo.236 1997 協会
- 重岡卓「『湖東系軒丸瓦』の基礎的研究」 紀要11号 1998
協会
- 畑中英二「近江の9世紀代の土器様相と問題点」北陸古代土
器研究6 1996a 北陸古代土器研究会
- 畑中英二「近江」古代の土器4 煮炊具(近畿編) 1996b
古代の土器研究会編
- 原山充志「丹波・丹後・但馬」「近江」古代の土器4 煮炊具
(近畿編) 1996 古代の土器研究会編
- 三好美穂「都城の煮炊具—藤原京・平城京・平安京—」古代
の土器—律令的土器様式の西・東4 煮炊具 1996 古代
の土器研究会編
- 山田幸弘「南河内」古代の土器4 煮炊具(近畿編) 1996
古代の土器研究会編
- ## 参考文献
- 『第4回東海土器考古学フォーラム 鍋と甕—そのデザイン
—』 1996 考古学フォーラム編集部
- 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の研
究」『研究紀要』第3号 1996 京都府埋蔵文化財研究所
- 斎藤孝正「灰釉陶器の研究Ⅱ」『名古屋大学文学部研究論集』
104(史学35) 1989
- 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」古代の土器—律令的土
器様式の西・東3 煮炊具1995 古代の土器研究会編

- 畑中英二「漕ぐ」 紀要10号 1997 協会
細川修平「古墳時代後期における琵琶湖の水運」『物と人』
古墳時代の生産と運搬展」展示カタログ 1997 安土城考
古博物館
森隆「近江地域出土の古代末の土器群について」『中近世土器
の基礎研究Ⅳ』 1988 日本中世土器研究会

追記

本論脱稿後、蒲生郡安土町に所在する大中の湖南遺跡出土資料の一部を実見する機会を得た。同遺跡は、弥生時代中期の集落跡・水田跡が検出されたことで著名な遺跡である。出土遺跡は弥生土器が過半を占めるが、古代末の土器群も多く出土している。これらの内に、犬上型甕の破片約20点を確認した。共伴資料のうち、比較的年代が近いものとして、多量の灰釉碗・皿と、京都産および猿投産緑釉碗・皿、「近江産」緑釉碗・皿、緑釉緑彩陶器碗が出土している。当該期の同遺跡は、施釉陶器と須恵器が遺物の過半を占め、土師器の供膳具や煮炊具がほとんど見られない。

犬上型甕の出土とあわせ、大中の湖南遺跡の実見範囲内での特徴を記し、今後の研究を待ちたい。

編集後記

今回は8編を数える多数の論文を掲載することができました。内容も、縄文時代から近世までと各時代の研究論文のほか、普及事業についての報告もあり、バラエティに富んだものとなりました。

埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しくなっていますが、我々の調査・研究の成果をわかりやすくお届けできるよう、今後も様々な形で努力していきたいと思えます。

(T. K)

平成13年(2001年)3月

紀要第14号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668